夕&Eye

健

壊疽（えそ）

足切断せず治す

糖尿病・動脈硬化で発症

ウジ虫で患部除去

細胞注射、血流良く

糖尿病や脚の動脈硬化といわれる閉塞（そく）性動脈硬化症が原因でできる壊疽（えそ）の治療が進歩してきた。血流の回復を促す細胞を注射したり、医療用に育てたウジ虫で死滅した組織を取り除いたりする。足を切断しなければ助からなかった重症患者でも歩けるまでに回復する人がいる。

都内に住む村井靖彦さん（仮名・59）は糖尿病が原因で右側の足に壊疽ができた。放っておくと切断しなければならないと言われ途方に暮れたが、「マゴット（ウジ虫）セラピー」と呼ぶ治療法があることを知り、約一年前に日本医科大学を受診した。

マゴットセラピーは無菌のウジを二、三日傷にのせて、死んだ組織を取り除く。抗生物質が効かない耐性菌を殺菌したり、傷の回復を促したりする効果もある。

ウジ虫が傷の治療などに有効なことは昔から知られている。戦場で傷にウジ虫がわいた兵士の方が早く治癒したことから、十九世紀に欧米で広がった。抗生物質ができて廃れたが、耐性菌の登場で再び注目されるようになった。

日本医科大学ではこれまでに十九人が治療を受け、八割が成功した。岡山大学、埼玉医科大学などでも治療に使っているという。

村井さんも治療前は車いすに乗るほど痛かったが、今は歩けるようになった。

壊疽は糖尿病や動脈硬化で脚の血流が減る「下肢閉塞性動脈硬化症」で起きることが多い。カテーテルという細い管を血管に入れて広げたり、血管を移植するバイパス手術をしたりするが、血管が細いひざ下は血流が減っていると難しい。感染がひどい場合も、傷を覆うために人工の皮膚を移植しても定着しないなど重症化しやすい。

壊疽が悪化すれば敗血症などで死亡する恐れも出てくる。足を切ってしまうと患者の二年間の生存率は約五〇%。国内では年間二万人が糖尿病などのために足を切るという試算もある。「足を切るほど重症の患者は全身で動脈硬化が起きており、脳梗塞などのリスクが高い。切断で歩けなくなるとさらに動脈硬化が進む」と日本医科大学の宮本正章・助教授は説明する。逆に壊疽が治れば歩く量が増え、健康状態が良くなる可能性もある。

血管を増やす細胞を注射する治療も足の切断を回避できる方法の一つ。「単核球」と呼ばれる白血球の一種で、動脈硬化を起こした血管の周りの筋肉に注射して血流を回復させる。この細胞は患者自身の骨髄液や血液から採取できる。

ほかにも埼玉医科大学の市岡滋・助教授らが人工皮膚を骨髄液に浸して傷に移植する方法を開発するなど、いろいろな手法が各地の病院で始まっている。

従来の治療法も進歩してきた。カテーテルを使い体にメスを入れない「血管内治療」は患者の負担は軽いが、これまではバイパス手術の方が効果が高いとされてきた。最近は「器具の進歩などで血管内治療ができることが増えてきた」と千葉大学の石田厚講師は解説する。

千葉大の南野徹助手は「治療の際は壊疽だけでなく全身の血管の状態を見て、脳梗塞などの危険がないかを調べるべきだ」と注意する。たばこは動脈硬化を進行させ血管が収縮する原因にもなる。治療を成功させるには禁煙が必須だ。

糖尿病などが原因の壊疽の治療法

ひざより上で血行が悪いが、ひざから下はよい場合

- カテーテルを使った血管内治療で血管を広げる
- 患者の血管や人工の血管を移植するバイパス手術をする

ひざより下で血行が悪いなど、上記の治療法がうまくいかない場合

- 骨髄液や血液にある血管を増やす細胞を患者自身から採取。血行が悪い部分に注射する
- 骨髄液に浸した人工皮膚を傷に移植する
- 血管を増やすたんぱく質をゼラチンに混ぜて血行が悪い部分に注射する
- 医療用のウジ(マゴット)に死んだ組織を取り除かせる

体のシグナル

気管支異物

レントゲンでの発見難しく

Aちゃんは一歳十一カ月の男の子。お父さんが食べていたピーナツを口に入れていた時にお兄ちゃんに背中をたたかれ、激しく咳（せき）こんだ。お母さんがあわててAちゃんを抱き上げたが、特に変わった様子はなかった。

しかし、夜から呼吸がゼイゼイするようになり微熱もある。翌日、近くの小児科医院で診てもらうと先生は「気管支炎でしょう」と抗生物質を出してくれた。次の日、呼吸は楽になった。

ところが、薬が切れると元の症状に戻ってしまった。ピーナツの話をお母さんから聞いた小児科の先生が、ピーナ